

場所を表す名詞「あたり」の 接続辞化について

劉川菡

◆要旨

場所を表す名詞「あたり」が名詞節を作る際、助詞を介在せず主節を直接修飾し、接続辞のように振る舞う現象がみられる。本稿はその現象をとりあげ、語や句と共に起る場合と、節と共に起る場合に用法を分けて、「あたり」の接続辞化の仕組みを明らかにした。その結果、①「あたり」には時空間表示、部分提示という2つの基本的な用法と、前文脈指示、他項暗示という2つの周辺的な用法が存する他、節と共に起ることで生じる前文脈評価用法があること、②「あたり」の接続辞化は前文脈評価用法において、「あたり」節に副詞節化が起こることによる現象であること、③副詞節化の要因は、範列から「あたり」節の事態を選び出す際、その範列の在り方が話し手の頭の中で曖昧化することによることなどを明らかにした。

◆キーワード

範列、明示・暗示、名詞節、副詞節、点

◆ABSTRACT

Atari in modern Japanese has been conventionally considered as a noun to indicate locations. However, *atari* could also be used to directly connect to main clause without case particles, when attached to a noun-modifying clause. In such usage, *atari* manifests characteristics of subordinating conjunctions. This research explores how *atari* acts as a subordinating conjunction, via classifying its usages into two groups based on its attachment to either word/phrase or clause. The findings are summarized as follows.

First, aside from well-researched usages of *atari*, it can evaluate aforementioned contexts. Second, in such usages, transition of *atari* clause into adverbial one occurs, from which potential role of *atari* as a subordinating conjunction rises. Lastly, such transition stems from the ambiguity existing in the information when speakers list an example in the *atari* clause from information range.

◆KEY WORDS

paradigm, explicit and implicit indications, noun clause, adverbial clause, TEN (point)

Investigation of the Potential Use of *atari*, a Noun Indicating Locations, as a Subordinating Conjunction in Modern Japanese

LIU CHUANHAN

1 はじめに

名詞「あたり」は、例えば「現在の本丸休憩所のあたりに將軍の食事を整える大台所があった」のように、將軍の大台所の存在するところを漠然と示し、場所を表すものといえる。そして、波線部の「本丸休憩所」が示すように、位置を示す名詞を伴いながら使われるという特徴があげられる。

それに対して、「あたり」には修飾節を伴って使われる場合も存在する。その場合には、下記の(1)のように、「あたり」節に副詞節化が起こり、「あたり」が「接続辞化」する傾向がみられる^[註1]。

- (1) 相手のペースにはめられたあたり、谷川さんらしくないなあ。
(七色の逃げ水)

このように、名詞が修飾節を伴って名詞節を作る際、助詞を介在せずに主節を直接修飾し、接続辞のように振る舞う現象について、寺村(1992:301)は「相対性を表す名詞は本来副詞的な性格をあわせもっている」というように指摘した。ただし、「あたり」については言及していない。そこで、本稿は寺村(1992)を踏まえて、「あたり」の用法を考察することによって「あたり」を「相対性を表す名詞」として位置づけ、そのことを通して接続辞化する仕組みを明らかにすることを目的とする。なお、接続辞化した「あたり」と、場所を比較的明確に指示する「点」という語の接続辞用法との異同についても言及する。

2 先行研究

「あたり」を対象とする先行研究には、本稿と同じく「接続辞化の仕組み」の解明を目的とするものは見当たらないが、「あたり」を「場所」を漠然と表す名詞として位置づけた上で、その機能・用法を記述するものは幾つか存在する。それらは「接続辞化の仕組み」を明らかにする際、参考になるものと考えられる。

その中で、まず「あたり」の機能について言及するものとして、木村(2000)と芳賀ほか(1996:15-16)があげられる。両者とも「あたりには①その上接している名詞を中心として範囲を広げる機能と、②上接している名詞をはっきりと避けるために婉曲的に表現する機能という2つがある」という立場に立つものである。なお、後者は特に下記の(2)のような、②婉曲機能の場合の「あたり」を、多数の例文をとりあげることによって考察している。

- (2) 明日の午後あたり、一緒にお茶でもいかがですか。(芳賀ほか1996:15)
(3) 釜石辺りに犯人はひそんでいるんじゃないでしょうか。(木村2000:69)

ただし、木村(2000)でも言及されているように、2つの機能を明確に区別できない上記の(3)のような例も多数存在する。この点に関し、本稿は「あたり」がどのような機能を有していても、1つの語彙的な意味から切り離すことができないという立場をとる。このような立場に立つものは先行研究にもみられる。森田(1989:50-52)がそうである。

森田(1989)では「あたり」の意味を明らかにするために「基準点」という概念を重要視すべきであると主張した上で、「あたり」の語彙的な意味を「ある基準点を取り巻くある広がりを持った範囲を漠然とさす」としている。また、「何を基準点とするのか」という視点によって、「あたり」を、a.話し手の視点を基準点とする場合(= (4))、b.先行語が基準点を示す場合(= (5))、c.修飾語が基準点を示す場合(= (6))という3用法に分けている。

- (4) このあたり、実に砂丘が発達している。(もっと知りたいベトナム)
(5) 図の右中央あたりには「漂流里」という地名も見える。(鳥島漂着物語)
(6) 若冠二十八歳にして委員長の座を占めるあたりは相当のものだ。(森田1989:52)

ただ、森田(1989)の分析は「何を基準点とするのか」という視点に限られていて、「あたり」の「接続辞化の仕組み」が明確に示されているとはいえない。

そのほか、森田（1989）と類似し、「基準点」の概念を利用して「あたり」の語彙的な意味を分析したもものとして、田窪（1984）があげられる。上記の（4）（5）のような空間的な場所を表す「あたり」に限って対象を設定しており、その意味を他の場所名詞（ex. 左右、東西南北、上下、そば、となり）と比較して、「基準点から離れた地点、方向とか附近を示すものではなく、基準点そのものを漠然と示す」というように規定している。しかし、上の（2）（6）が示すように、「あたり」には空間的な場所を表すわけではない用法の例も多数存在し、「接続辞化の仕組み」を明らかにするには、空間的な場所を表す以外の「あたり」をも含めて、用法と意味を捉え直す必要がある。

なお、本稿の分析や考察はすべて『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下BCCWJと表す）から収集したデータに基づいているが、それによれば、「あたり」はI）上記（4）（5）のように共起要素が語や句となる場合、II）上記（6）のように共起要素が節となる場合という2つに分けられ、後者の場合には形式上・意味上、接続辞化の「あたり」と類似性をもつものが多数観察された。

そこで、本稿では、森田（1989）の意味記述を認めた上で、まず語や句と共起するものを対象として「あたり」の多様な用法を捉え直し、次にそれに基づき、節と共起するものを対象とし用法を分析すると同時に「あたり」節の性格を明らかにすることによって、接続辞化の仕組みを解明することを目指す。

3 語や句と共起する「あたり」の用法分析

語や句と共起する「あたり」には、意味上、次ページの図1に量的分布を示すような4つの用法が存する^[註2]。またそれと同時に形式上は i) 「あたりを見回す」のような自立して用いられる単独形式、ii) 「法隆寺のあたり」のような位置を提示する名詞を受ける「Nの」形式、iii) 「このあたり」のような指示詞を受ける指示詞前置形式、iv) 「熱海あたり」のような名詞を直接受ける接尾辞形式、の4つのパターンがみられる。

以下では3.1～3.4に分けて、①形式上どのパターンをとるか、②意味上、基準となる前接要素をどのように提示するのかという2点を中心に各用法を述べ、「あたり」の多様性を描出する。

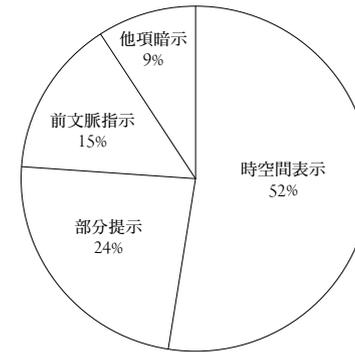


図1 語や句と共起する「あたり」の用法分布

3.1 時空間表示

この用法の「あたり」は形式上、先にあげた4つのパターンが全部観察される。意味上、森田（1989）と一致しており、ある基準点を取り巻くある広がりを持った範囲を表すものと考えられる。図1が示すように、最も多くみられる用法であり、「あたり」の基本的な用法といえる。例文としては（4）とともに下記の（7）（8）があげられる。

- （7）井戸は草原が終って雑木林が始まるそのちょうど境い目あたりにある。
（ノルウェイの森）
- （8）ビーチのあたりのお店やレストランは夕方あたりから営業しているところが多いようです。
（Yahoo! ブログ）

本用法の「あたり」は多くの場合、空間的・時間的な位置を漠然と示すような場面に使われる。例えば（7）の場合では、前接要素の「草原が終って雑木林が始まるそのちょうど境い目」を基準として、井戸の空間的な位置を「面的に示している。また、この用法は基準とされる前接要素が必ず「はっきりと指し示される一点」を表すものになるという点に特徴がある。なお、（8）の前

接要素「夕方」にみられるように、この用法の中には基準点が時間的な位置を表すものもある。以下ではこの用法を「時空間表示用法」と呼ぶ。

3.2 部分提示

この用法の「あたり」は形式上、ii)「N」形式、iii)指示詞前置形式、iv)接尾辞形式、の3パターンが観察される。意味上、時空間表示用法と類似し、前接要素を基準とするある範囲を漠然と表す。ただし、この場合、基準となる前接要素は、はっきりと指し示される「点」から、ぼんやりと提示される「部分」へと変容するという点で時空間表示用法と区別される。例文としては(5)とともに下記の(9)があげられる。例えば、(9)の場合、「あたり」の前接要素は身体の一部である「首や胸」になるが、前の(5)の場合、前接要素は図の一部にある「右中央」になっている。

(9) 発しんは、首や胸の辺りから出始め、全身に広がります。 (広報紙)

他方、この用法には「あたり」の前接要素が(10)(11)のように、程度や数量に関わるものになる場合もみられる。例えば(10)において、前接要素の「常温」は「部分」を表すものといいたくいが、「低温→常温→高温」のような温度が順番に並ぶスケールを考えれば、「常温あたり」はスケールの一部である「常温」の部分提示するものと見なせる。

(10) スーと切れる水の様なお酒。冷で飲むと、聖なるお水。常温あたりになると、美味しい冷酒。 (Yahoo!ブログ)

(11) 色が多くなるごとに色合いが鮮やかになり、影なども自然に出ると思います。年賀状くらいなら4色と8色の間をとって5～6色あたりを選択するのもお勧めですよ♪ (Yahoo!知恵袋)

なお、この用法は時空間表示用法と同じく「場所・位置」を漠然と示す場面に使われるものといえるが、(7)の草原と雑木林の境い目のあたりが示すように、時空間表示用法が井戸の絶対的な位置を表示するのに対して、この用法は

(9)のように、「全体のどこにあるのか」と発しんの出始める相対的な位置(全体に対する部分)を提示するというように考えられる。以下ではこの用法を「部分提示用法」と呼ぶ。

3.3 前文脈指示

この用法の「あたり」は形式上、iii)指示詞前置形式のものしかみられない。意味上、既にあげられた内容を再度議論する際、その内容を重複して提示するのを避けるため、「そ(こ)のあたり」という固定的な形式を用いて、当該前文脈を漠然と指示する用法である。例文としては下記の(12)(13)があげられるが、波線部で示される文脈が「そのあたり」の指示する部分である。

(12) もう少し<黄泉路爆運>なる人物について情報を仕入れておきたいという気がする。この人物が、どういっけいっけい、このサークルに入って小説を書くようになったのか、そのあたりの経緯を聞いておきたい。 (ネメシスの映笑)

(13) カメラでも、昔の金属製のは重くて不便だけど、どこか凛としたカッコよさがある。ほんとに使いこなせるのかなってというような若い女性が、ライカを持ったりしてるのは、物品としてもカッコいいからなんだろう。なんで昔のものに気品があって、いまの人間が惹かれてしまうのか。そのあたりは別のテーマになりそうだけど… (老人力)

この用法は、「そのあたり」に指示される文脈(波線部)が一部分として大きな前文脈に存在するものになるという点で、部分提示用法から派生するものと考えられる。いわば、大きな前文脈が全体となって、波線部という特定の「位置・場所」を漠然と指示していると理解できる。

ただし、「そ(こ)のあたり」は単純に全体の中で特定の「位置・場所」を指示するだけに止まらないと思われる。例えば、この用法には(13)のようなものが多くみられるが、その場合、「そのあたり」に指示される部分(波線部)が「当該文脈までの内容に対して、話し手が個人的にどのように思っているのか」というような話し手の判断を示す内容になる点が特徴としてあげられる。

つまり、この用法は、部分提示用法の意味を受け継ぎ、特定の前文脈を漠然と指示するものであるが、実際に使用される際には、一度既にあげられた個人的な判断・意見を婉曲的に指示するとみられる場合が少なくない。以下ではこの用法を「前文脈指示用法」と呼ぶ。

3.4 他項暗示

この用法の「あたり」は、形式上、iv) 接尾辞形式のものしかみられない。また、意味的には、ある範囲内に存在する幾つかの候補項目から自分なりの選択項目Xを取り出す際、はっきりと主張するのを避けるため、「Xあたり」の形で提示し、Xと類似性のある他項目の存在を暗示するという用法になっている。図1が示すように、「あたり」の最も周辺的な用法といえる。森重(1954:70-71)が「群の一部の要素を例示し、他の要素を臚化的に暗指する」というように示した「副助詞」との類似性がみられる。例として、まず(14)をみてみる。

- (14) 初期のタイプの代表作として『ブレーグ・コート』の殺人』『火刑法廷』、中期として『ユダの窓』『緑のカプセルの謎』、歴史物として『ピロードの悪魔』『火よ燃えろ!』あたりがあります。(Yahoo!知恵袋)
- (15) ロレンスの小説には「フリント・ナイフ」といふのがよく出て来て、それがこの原始人のナイフですが、昔の翻訳ではよく「火打ちナイフ」と訳してあつた。でも、この場合の「フリント」は「火打ち石」ではなく「硬い石」ですから、「石ナイフ」あたりがいいのぢやないか。(オール讀物)

(14)は話し手がジョン・ディクソン・カーというアメリカの小説家の作品を紹介する際、歴史物という範囲内の代表作として、『ピロードの悪魔』『火よ燃えろ!』の2作品をとりあげる場面である。ここでは特に、自分の推薦作を提示する一方、代表作としてあげられる作品が他にもある、と他候補の存在を暗示するニュアンスが読み取れる。その結果、(14)では話し手がカーの代表作を推挙する際に、自分の主張を弱める効果が生じていると考えられる。

また、この用法は他の用法と断絶しているわけではなく、部分提示用法にある、数量・程度と共起する(10)(11)のようなものから派生してきたと考えられる。例えば(10)の場合は、1つのスケールが全体となって、スケール上に「低温・常温・高温」などの部分が順番に並んでおり、「常温あたり」はその中の「常温」という部分にスポットライトを当ててとりあげていると理解できるが、本用法になると、「全体」とされるのは「スケール」の代わりに、カーが書いた歴史物のような段階性をもたない「範列」となる。つまり、(14)はカーの歴史物という範列が全体となって、その中に複数の項目(作品)が並列的に存在しており、「Xあたり」は範列内の2項目『ピロードの悪魔』『火よ燃えろ!』にスポットライトを当ててとりあげていると理解できる。

一方、この用法には上記の(15)のように、前接要素が話し手自身が最も適切であると考え、範列中のただ1つの項目になる場合もみられる。

ここでは、項目Xにスポットライトを当てる際、話し手がどのようにして項目Xを範列から選び出すのかという側面に注意してほしい。その手続きは「フリント・ナイフ」の全ての翻訳語という範列において、話し手が各翻訳語(項目)に自分なりに軽重差をつけ、最も「重」と思われる1つの項目を選び出すというように考えられる。

つまり、この用法は話し手がある範列内で、各項目に自分なりに軽重差をつけて、「重」と思われる項目Xを提示する際、個人的な選択を明確に示すのを避けるために、「Xあたり」の形でXと類似性のある他項目を暗示し、Xを曖昧に提示するものといえる。以下ではこの用法を「他項暗示用法」と呼ぶ。

4 節と共起する「あたり」からみる接続辞化の仕組み

第3節では、I) 語や句と共起する場合を対象として、「あたり」の用法上の多様性を描いた。本節では、II) 前接要素が節の形をとる「あたり」を対象とし、第3節を踏まえてその接続辞化の仕組みを明らかにする。

節を伴って名詞節を作ることが、「あたり」の接続辞化する1つのきっかけであるといえる。ただ、節を伴えば、必ず接続辞的な性格が顕著になるというわけではない。なぜなら、「あたり」の名詞節用法には2つのタイプが存在す

るからである。1つは、下記の(16)(17)のように、意味上第3節に述べた用法を受け継ぎ、前接要素が語や句から節の形に拡張しただけのタイプである(ここでは時空間表示の例をあげる)。もう1つは、(18)(19)のように、意味上第3節の用法と異なり、前接要素が節になってはじめて生じるタイプである。ここでは前者をタイプII-1、後者をタイプII-2と呼ぶ。

- (16) ピールを二本空けたあたりで、ふたりは腰をあげた。(蟹の町)
- (17) 今、兄の店があった辺りにコンビニが出来ていた。(父からの手紙)
- (18) どんぶりにいれて紅ショウガとねぎをちらす。赤白緑とイタリアンカラーじゃありませんか。しかしこれ、例の激安店で5食パック199円だったもの。やっすーと思ってしまうあたりがこわい。(Yahoo!ブログ)
- (19) そういえば、①おれはともかく、さざりにとっては初恋でしたね。②最初のころのさざりは、手をつないだときに手汗をびしょりかいていたと思います。あれはなんだか、こっちも緊張しました。③まだラブラブだったころ、さざりはおれに「私ね、男って顔で決まるとは思わないの」といつも言っていましたね。よかれと思って言っている言葉が人を傷つけるあたりは、天然爆弾のさざりらしいなあと思います。
(①、②、③は引用者による) (Yahoo!ブログ)

タイプII-1は、単純な名詞節形成用法であり、そこから接続辞的な性格が生じてくるとは考えがたい。それに対して、タイプII-2は意味上接続辞化した「あたり」を伴った文と類似性がみられるほか、形式上も、上記の(18)では「が」、(19)では「は」が付く点を除けば、接続辞化の「あたり」とかなり似通ってくる。その点に基づき、本稿は接続辞化する「あたり」節はタイプII-2の名詞節用法から派生するものと考え、以下で接続辞化の仕組みを考える際、タイプII-2を対象とする。

4.1 「前文脈評価用法」からみる「あたり」節の性格

ここからは「タイプII-2」を「前文脈評価用法」と呼ぶ。前文脈評価用法の場合、「あたり」節は形式上名詞節になっているが、主名詞「あたり」には「場

所」の意味合いが薄れている。また、ほとんど「は」と「が」にしか続かない。

本項ではまず前掲の(19)を例として、そのような「あたり」節には具体的にどのような性格が含まれるのかを明らかにする。そこには「あたり」の接続辞化を引き起こす要因が潜んでいると考えられるからである。

「あたり」節には2つの性格があると思われる。1つ目の性格は「あたり」節が表している独自の意味に関わる。(19)では、「あたり」の前接要素(波線部)は節の形をとって、話し手の個人的な評価を表している。具体的にいえば、「私ね、男って顔で決まるとは思わないの」という前文脈③にあるさざりの言葉(点線部)を、「よかれと思って言っている言葉」と言い換えた上で、「人を傷つける(ここの「人」は話し手を指している)」というように評価を加えているものである。

つまり、「前文脈評価用法」の「あたり」節は、話し手の個人的な評価を表すものになるとともに、評価の対象とされるのが前文脈(ここでは③になる)から受け入れるものに限られるという点で独自性がみられる。節の形で表されるというのもそういった評価対象を受け入れて、その上で評価を加えるという場面に応じて生じる現象だと考えられる。

このように、前文脈評価用法における「あたり」節は、意味上、既にあげられた内容をそのまま受け入れ、それに対して加えた個人的な評価をとりあげるものといえる。以下では意味上の側面からみる「あたり」節のこのような特性を「性格A」と呼ぶ。ただし、「あたり」節のこの性格は必ずしも語や句と共起する「あたり」と完全に切り離せるわけではない。個人的な評価を表すにあたって、評価対象とされるものが前文脈にすでに述べられたものに限られるという点で、「前文脈指示用法」の「あたり」と共通性があると考えられる。

次に、上に言及した、「あたり」節の評価対象が前文脈③であるということに注目する。①～③という3つのことを述べているのに、③に対してだけ、「あたり」節によって評価を表すのはなぜであろうか。その理由は「あたり」節のもう1つの性格に関わる。すなわち、既に述べた文脈である①～③がそれぞれ項目として1つの範列を構成しており、その中で話し手が各項目に自分なりに軽重差をつけて、最も取り上げたい項目にスポットライトを当てた結果、③が取り上げられたという点である。このような、評価対象の選び出し方に関わる側面からみる「あたり」節の特性を、以下では「性格B」と呼ぶ。この性

格は「他項暗示用法」の「あたり」と共通する側面があるといえよう。

なお、前文脈評価用法の「あたり」節（タイプII-2）を究明する際、タイプII-1との区別も重要な一側面である。ここでは形式上、意味上に分けて、両タイプの最も著しい相違を簡潔に述べる。まず形式上、タイプII-1は（16）（17）のように、「あたり」節に「で、に」などの格助詞を伴うことが多い。それに対して、本用法の場合は（18）（19）のように、「あたり」節は「は」と「が」しかとらない。その場合、「は」は提題の用法であり、「が」は総記の用法であるとみられるが、このことは上に述べた「あたり」節の性格Bを考えれば理解できるであろう。次に意味上、タイプII-1の「あたり」節は第3節の用法と共通し、前接要素の表す基準が「事柄」に拡大するだけにとどまるものであるのに対して、本用法の「あたり」節は前文脈で最も興味がある内容にスポットライトを当てて、自分なりに言い換えたり評価したりする内容を提示する、という語や句と共に起る場合にみられない意味を表すものになっている。

4.2 「あたり」節が副詞節化する要因

前文脈評価用法における「あたり」節は下記（20）のように、「は」と「が」を介在せずに主節を修飾するように変化することがある。その場合、「あたり」節が直接主節を修飾する点で、副詞節化しているといえる。その結果、「あたり」は接続辞のように見える。本稿では「あたり」のこのような用法を「接続辞用法」と呼ぶ。

- （20） やっと自分にはこの旅行で前向きに一人の将来を考えることが必要だと考えられるまで、健康な精神状態に戻れた。それでも、旅行前に、旅行中に何かがあった時のために、たくさんの遺書を残していたあたり、かなり人生に悲観的になっていた私。（筆者注：「それでも」という逆接表現に注意）
（アメリカ大陸行き当たりばったり）

4.1では前文脈評価用法における「あたり」節の性格を明らかにしたが、本項ではそれを踏まえて、「あたり」節が副詞節化する要因を明らかにすることを通して、「あたり」の接続辞化の仕組みを究明する。

「あたり」節の副詞節化する要因を解明するということは、なぜ「あたり」節が「は」と「が」を介在せずに直接主節を修飾できるのかという点を明らかにすることである^[註3]。

その要因は、「あたり」節が接続辞用法に派生する際に起こる「性格B」の変質と関わっている。（20）において具体的に説明すれば、話し手がかなり人生に悲観的であるという感想を表す際、根拠として思いつく事柄には、①たくさんの遺書を残していたこと以外にも幾つか考えうる。例えば②食欲不振だったこと、③動いたり出かけたりすることを控えたようなことがあるが、（19）などの前文脈評価用法と異なり、（20）における上記項目①～③は、文脈に既にあげられたことではなく、話し手の頭の中に曖昧に存在するものである。このように、範列の在り方の曖昧化に伴って、その中から「あたり」節の事態を選び出す際、範列から1つを取り上げるという意識が弱くなるため、「たくさんの遺書を残していたあたり」という節が「は」を受けて明示的に主題化されにくくなったのである。同様に、総記の「が」が落ちる場合も、範列の在り方が曖昧化することによって、その中の1つの事態を指示する意識が弱まる点に原因があるものと考えられる。なお、このことは「あたり」文の主節に話し手の主張を柔らげるという効果を強く与える。なぜなら、範列が曖昧化することは話し手の事態を選び出すという意識を弱めることになり、結果的に話し手の主張が弱まるからである。

以上、「あたり」節が副詞節化し、「あたり」の接続辞化が生じる仕組みについて考察したが、一方、「あたり」には元々接続辞化を支える性格が存在するといえる。それは「あたり」の用法全体に通底している、「明示・暗示」という相対関係を含意することである。このような相対的な関係にある「明示・暗示」は寺村（1992）が主張する「相対性」に対応すると考えられる。

5 接続辞化する「点」との異同

場所を漠然と表す「あたり」に対して、場所・位置を比較的明確に指示する「点」という語が存在するが、下記の（21）に示すように、「点」にも接続辞化する用法がみられる。本節では第4節を踏まえ、接続辞化の「あたり」と「点」

の異同について述べる。その際、複文の前節を従属節、後節を主節と呼ぶ。なお、従属節末尾に使われる「～点で」については森山(2000)に考察がある。

(21) すなわち先に述べた陳寿の『三国志』の裴松之注である。裴松之は百五十六種の資料を収集して、本文三十五万八百三十三字に対して、三十二万二千六百四十三字におよぶ注を完成して、宋の文帝に献上した。注の字数が本文の字数に迫っている点、その精力的な仕事ぶりが察せられる。
(三国志と日本人)

まず、両者の共通性について述べる。一つ目として、「あたり」も「点」も元々場所を表す名詞であり、従属節を構成する際、「点」節も「あたり」節も主節が成立する「場」を限定するものとなっている。二つ目として、第4節で述べたように、「あたり」節は指示対象を選出する際に、ある範列を背景とし、その中の一つの項目にスポットライトを当てて取り上げるが、この性格が「点」節にもみられる。例えば(21)の場合、背景とされるのは「裴松之注の特徴」という範列であり、その中から「注の字数が本文の字数に迫っている」という項目が、話し手の最も注目したものとして「点」節に取り上げられているのである。

続いて、両者の異なりについて述べる。一つ目は、従属節に指示される内容にどのような制限がみられるのかという点である。個人的な評価・選択を取り上げる「あたり」節と異なり、「点」節はある物事の属性・特徴に関わる、比較的客観的な内容を指示する傾向が強い。例えば、(21)では、従属節に指示された「注の字数が本文の字数に迫っている」ということが『三国志』の裴松之注の客観的な特徴になっている。二つ目は、従属節の内容を指示する際、両者がそれぞれどのようなニュアンスを伴うのかという点である。「あたり」の場合、話し手の個人的な評価・判断を婉曲的に提示するのに対して、「点」はある物事に対して一般的な認識をはっきりと指し示すという特徴があげられる。

「あたり」節と「点」節のこういった相違が両者の次のような使用上の違いにつながる。「あたり」節は一種の婉曲表現なので、自分の主張や意見をやわらかく提示する時に使われるのに対して、「点」節は明示的なので、自分の主張や意見を強く提示する時に使われる。

6 まとめと今後の課題

場所を表す名詞「あたり」には主名詞として名詞節を作る時、助詞に続かず直接主節を修飾し、接続辞のように振る舞う現象がみられる。本稿はその現象に注目し、I) 語や句と共起する場合とII) 節と共起する場合に分けて、「あたり」の多様な用法を描出した上で、その接続辞化の仕組みを明らかにした。

その結果、「あたり」には時空間表示、部分提示という2つの基本的な用法と、前文脈指示、他項暗示という2つの比較的周延的な用法が存する^[註4]ほか、節と共起してはじめて生じるものとして、前文脈評価用法が観察された。特に、前文脈評価用法は(話し手が)前文脈で最も興味がある内容にスポットライトを当ててとりあげ自分なりに評価するという用法であり、接続上、提題の「は」と総記の「が」にしか続かず、性格上、前文脈指示用法と共通する性格Aと、他項暗示用法と共通する性格Bの2つの性格を有していることがわかった。

また、「あたり」の接続辞化は、前文脈評価用法において「あたり」節に副詞節化が起こることによる現象であり、副詞節化を引き起こす要因は、上述の性格Bの変質、すなわち、評価対象を選び出す範列の在り方の曖昧化という点にあることが明らかになった。その他、「あたり」の用法全体に通底する、共起要素を明示すると同時に同範列にある他項目を暗示するという「相対性」も接続辞化を支えていることを示した。

日本語ではコミュニケーションを円滑に進めるにあたって、このような個人的な評価・意見を婉曲に表現するテクニックが欠かせない。本稿は、「あたり」を例として、どんな言語にも見られる場所を表す語から出発し、日本語で個人的な意見を表す時に使われる婉曲表現の成立する仕組みの解明を試みた。このことが日本語学習者に対して、婉曲表現をよりよく理解させるとともに、日本語学習における会話能力の向上を促進することが期待される。

「あたり」と「点」と同様に、「以上」と「かぎり」の2つの語も主節が成立する「場」を限定して提示するという接続辞的な機能を有するものとしてあげられる。今後はこの4語を対象として、場所を表す名詞がどんな原理によって

接続辞化するのかを研究したい。また、それと同時に、「主題文」や「前提条件文」との関係も明らかにしたいと考えている。 (東北大学大学院生)

付記

本稿は、2017年10月1日に大阪大学で行われた、「日本語／日本語教育研究会 第9回研究大会」において口頭発表した内容に大幅な加筆修正を加えたものである。発表に際し貴重、かつ有益なご意見をくださった方々に心より御礼申し上げます。

注

- [注1] …… 本稿での例文は先行研究からのものを除き、基本的に『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』から収集したものである。
- [注2] …… 図1はBCCWJの検索アプリケーション『中納言』を利用し、キーを「語彙素一辺り」に設定して得られた12128例から、無作為に抽出した例文250個を分析した結果に基づく分布である。ただし、明確に分類しにくいものもあるので、図1はあくまでも傾向を示すにすぎない。
- [注3] …… タイプII-1の名詞節においても助詞が落ちる場合があるが、それは助詞がなくなると、「場所・位置」を意味する名詞節が主題化した場合であり、ここでの副詞節とは異なる。例として、「犬が掘り返したあたり、一番怪しそうですね」(作例)があげられる。
- [注4] …… この4つの用法の間には共時的に、時空間表示から部分提示が派生し、部分提示から前文脈指示と他項暗示の2つがそれぞれ派生するという方向性が窺えるが、それはあくまでも用法間にみられる表層的な関係であり、本稿のテーマ「接続辞化の仕組み」においては、本質的な問題ではないと考える。

参考文献

- 木村みゆき (2000) 「「へん」の用法について—「あたり」と比較して」『国文』93, pp.64–75. お茶の水女子大学国語国文学会
- 田窪行則 (1984) 「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12, pp.89–115. 大阪外国語大学研究留学生別科
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集1—日本語文法編』くろしお出版
- 芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美 (1996) 『あいまい語辞典』東京堂出版
- 森重敏 (1954) 「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』23(2), pp.65–76. 京都大学国文学会
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (2000) 「「点」考」『国語学』201, pp.31–45. 国語学会